河上肇記念会報

No. 3.
1977. 5.

〒530
大阪市北区梅ケ枝町一九九（星光ビル）
菅原法律事務所内　河上肇記念会
電話　（〇六）三六四―六七七一
振替口座　大阪　三一三一九五

特集　追悼

故　末川博先生
故　福井孝治先生

明暗三つづつを
―末川先生を偲び―

住谷悦治

末川先生とはお会いするたびにいつも明朗で何かしら活力を感じさせられていた。はじめて先生の講演を聴いたのは昭和五年二月一日に第二次普選の衆議院議員に京都から河上肇博士が立候補されたときその応援演説会が下鴨小学校で盛大に行われた時であった。河上博士は当時五二歳であったが連日の政見発表でお疲れらしく平素からお痩せになっている博士はことのほか弱々しく熱意はいっぱいだったが声もしゃがれていて生彩が乏しかった。画家津田青楓の応援演説などはじめてのことであったらしく訥辯で奇異の感じさえあった。末川先生はこれに反し若々しく活気に満ちたものであった。内容はアメリカの金融恐慌のことらしかったが実にたのもしい感じを聴衆に与えたらしい。末川先生のこうした印象はその後少しも変らなかったと思われる。第二回の印象は敗戦後の

目　次

明暗三つづつを―末川先生を偲び―（住谷悦治）……1
末川博先生を悼む（白石凡）……2
末川先生を偲んで（川勝伝）……3
末川先生と河上肇記念会と私（大門英太郎）……4
末川先生と運転手（安井功）……5
福井孝治君を悼みて（藤田敬三）……6
東京河上会と河上肇記念会との統合について（事務局）……7
（第一回講演会）講演要旨……8
（第二回講演会）報告……8
（総会記念講演）要旨
「社会問題研究」について（天野敬太郎）……9
事務局だより……9
編集後記……10

昭和二一年久々に第一七回のメーデーが京都で催されたとき、御苑の陽明門前の広場に集合した時のことである。（昭和一一年第一六回メーデー以後禁止されていたメーデーが復活して全国的に活発盛大に催された。）赤旗や組合旗の靡る京都の労働組合や各種集団の大衆の前で、にわか作りの演壇に立った末川先生は大変活気のあるメーデー祝賀と激励演説をされた。拍手また拍手。歓声また歓声であった。先生はそのデモンストレーションの先頭にメーデー運動の指導者たちとスクラムを組んで行進し、円山公園音楽堂まで歩かれたと思う。先生の活力的印象の第二回目であったが、それ以後はすべて抱括的に第三回目とする。ズット何回も何回も、そうした集会には必ず末川先生は激励演説や挨拶を述べられた。その度ごとの印象は同じく健康で活力があって、何らのかげりの感じられない明朗な、そして優しく知的な学究的な、進歩的な文化人、という印象を与えられるお人柄であった。誰れに会ったときでも「おう！」と言ってにこやかに対応して下さる末川先生から受ける印象は殆んど共通ではないかと思う。

つぎに末川先生が低血圧で倒れられたと伺っているが二月一五日に先生のご最後のKatastrophenの前につづく二回の低血圧に襲われてダウンした事件を胸痛きまでに思い出す。その第一回は一九七〇年（昭和四五年）の七月二九日、末川先生に御相伴して岡部伊都子さんとわたくしとの三人が個人タクシーの運転者で京都の名所旧跡に詳しい安井功さんの車で岡山や峰定寺方面に見学漫歩したさい、峰定寺への坂道で先生がダウンして歩けなくなってしまったことである。お顔の色もわるくやや長い間道端の木陰で草の上に休憩して帰途に就いたことがあった。第二回には一九七二年（昭和四七年）一一月一九日先生が岡部さん、藤木正治さんたちと安井さんの車で修学院離宮を拝観した時。それは先生八〇歳の祝賀の前日のことであったが、先生は離宮の「上の茶屋」まで上ったとたんにダウンしてしまった。この時こそ皆びっくりして岡部さんに看護を頼んで藤木・安井両君は下の門衛所まで駈け降りて救急車を呼び「上の茶屋」まで同乗し、やや回復した先生を御自宅までお伴した。勿論この第二回目は二年前の第一回目より遥かに大変な低血圧の襲来であった。その後回復されてからは、疎水の桜、醍醐寺の桜、南禅寺、山科毘沙門、清流亭見学などの漫歩見学には名古屋大学小方教授夫人で末川先生の長女泰子さんがお付添いになったこともあった。昨年までの漫歩散策は何事もなく安井さんの車で先生はわたくしたちとの外出を楽しまれたようであった。今年の二月は寒さがことのほか厳しく低血圧はとうとう三回目にだいじな先生の生命を永久に奪い去ってしまった。

末川博先生を悼む

白石　凡

故末川博先生は、「東京河上会」および「河上肇記念会」にとって、かけがえのない支柱であった。先生は、この東西の会が継続し、年々発展してゆくのを、河上肇博士の縁者として感謝すると言われ、その運営については積極的に口をさしはさむことをひかえめにされていたが、われわれは、何かと相談をもちかけ、会合にもひき出し、末川先生が御健在であることが励げましになり、会を発展させる力としていた。

河上肇博士のような大きい人物は、その業績と人を過不足なく評価し、理解することがなかなかなつかしい。若いときから博士に接触し、縁者として内から、社会科学者として外から観察された末川先生が、折にふれて語られた河上博士の姿は、目のゆきとゞかないわれわれに、適切な手引きとなった。

末川先生は、青春時代、人生いかに生くべきか真剣に悩み、大正デモ

クラシーに鍛えられ、吹き荒れた昭和ファシズムの嵐とたたかい抜き、戦後は新日本建設のための確固とした礎となられた。しかも齢を重ねて体も強健とはいえないようになっても、真理を求めてやまぬ闘志と若々しい情熱をもちつゞけて、民間の平和と民主化のあらゆる運動の先頭に進んで立たれたのである。

このような先生を先達として、河上肇博士を記念し、これを広くかつ永く伝えるための事業を進めることができたわれわれは幸せであった。それだけに、先生が忽然としてわれわれの前から姿を消してしまわれた嘆きは、沈痛というもおろかである。

われわれは、先生が身を以て示された教訓のすべてを学びとることはできないにしても、当代一流の学識をひけらかすことなく、ひたすら庶民を愛し庶民に奉仕された精神を実践する努力をせめて致したいと思う。これはまた河上精神に通じる道でもある。「東京河上会」と「河上肇記念会」は、協力して時宜に適した発展を工夫し、末川先生の期待に応えなければならない。

このうえない悲しみを決意にかえ、謹んで末川先生の逝去を追悼する。

末川先生を偲んで

川　勝　傳

一九七七年二月十六日の四時十五分、末川先生は、わたくし達の手のとどかない、声のとどかない遠い遠い世界に、ひとり静かに旅立たれた。ほんとうに卒然としたお別れであった。

学界はもとより、この国の政治、経済、教育、文化、社会の巾広い各界の人びとは、おどろきと、悲しみと、ついで、いいようのない寂莫の感を深くしたのである。

日が経つに従って、わたくしの心に大きな空洞ができた。ことばにならない、表現のしようのない寂しさとともに、寄りどころを失った身辺のむなしい心情は、どうしようもないのである。

わたくしが先生の教えをうけたのは半世紀のむかしである。

その後、先生と比較的身近い関係となったのは、敗戦後、立命館が崩壊の危機にさらされた当時、石原広一郎氏らとともに、立命館の再建に先生のご出馬をおねがいしたときからである。

じらい三十年、先生には、はかりしれない教えをうけた。学恩をいただいたというよりは、師恩をしみじみと感じるという関係であるが、先生は、そのような堅くるしい感情は全く持ち合せていなかったようである。

お会いすれば、何となく雑談に時間を過すのであるが、わたくしのおしゃべりを快よく聞いていただいたが、時に、おだやかなことばの中で、きびしい批判をいただいたことを、うれしく、なつかしく思い出すのである。

「君とは話が合うようぢゃなあ」とよくいわれたものであるが、その一面、わたくしのことをなにくれとなく心配していただいたものである。

ずいぶん以前のことになるが「もうぼつぼつ京都へ帰ってきてはどうか」といわれたこともあるが、数年前「当分、京都へ帰れそうもないなあ。いそがしくて大変らしいが元気でやることだ」といって色紙をいただいた。

「不将不迎応而不蔵」という荘子の詞が書かれていた。

わたくしにとっては慈父のような先生であった。わたくしは毎日、先生からいただいた色紙と向い合って、あたたかい先生の声を静かに思いうかべながら、先生のご冥福を祈りつづけてゆかなければならないことになった。

末川先生と河上肇記念会と私

大門　英太郎

「昭和五二年二月一六日、私たちは慈父のような存在を失った」。末川先生の死をいたむ奈良本辰也さんの文の冒頭の言葉である。（朝日ジャーナル Vol. 19, No.12）まさに私にとっても、わが河上肇記念会にとっても、まさにその通りである。

河上肇記念会が創立されて、世話人共の懇請を容れて世話人代表になって頂いてから、常に折にふれ、事ある毎にご相談ご指示をうけて来たのである。

「河上肇遺品展図録」「河上肇記念会会報」「法然院歌碑拓本」等々の題言の揮毫、会報の巻頭文、拓本の解説の執筆、講演会、毎年の法然院の総会における講演等々、ことごとく先生を煩し、考えて見れば、わが記念会は先生なくしては日もくれず夜もあけぬ有様であったのである。

先生今や亡し、中心の柱を失った悲しみと戸惑いに自失している有様である。

お許しを願って、私なりの先生追慕の思いをしばらく述べさせて頂きたい。

第一に私が感激に耐えぬし、光栄と感銘しているのは、一昨年私が古稀を迎えたにつき末川先生、住谷先生、そして私が初めて社会主義の手ほどきをしたという松田道雄さん、この三人の碩学が祝って下さった事である。

これは安井功さん父子、小泉民次君が取りしきって下さって、八月一日の暑い私の誕生日に、雲ケ畑の山をわけ入った志明院で、私夫妻と京都に勤務している女婿中島も招いてお寺ご自慢の心のともった料理を頂戴した事であった。偖々私ごとき者が、このようなお祝をしていたゞくとは、私も愚妻も生涯の感激である。そのときお祝に頂いたお祝の詩をこゝに披露させていたゞく。

祝　大門雅兄古稀　　末川　博

春山煙暁　夏山過雨
秋山晴翠　冬山瑞雲
蓬々勃々　生新気象

祝大門君古稀而春山之賦献南山寿
一九七五年八月於洛東岡崎草堂
博　書

春夏秋冬、益々元気に励めという有難い励ましと、南山の寿を賜ったのである。私としては、この頂戴した寿を大切に、生新として馬齢を重ねて会のお世話を続ける覚悟である。

（因に同時に頂いた、住谷先生の色紙は

学而事人

祝古稀

大門英太郎学兄　同志社総長　住谷悦治）

昨年三月二七日、黒谷常光寺で河上門下の石川興二先生の葬儀の際、焼香をすませて門の処で末川先生とご一緒になり、「今日は君の好きなコーヒーのうまい所に案内してあげよう」とおっしゃって、先生にとっては毎日の案内知った散歩路、露路の近路を通ってのコーヒー店（名前は失念）に座って、コーヒーとケーキをご馳走になった。石川先生やご遺族の事が話題に上った外は、何のお話をしたのか全く覚えがない。

そとはかとない小一時間をこの偉大なお人と送った事は、これまた望外の幸であった。

お送りすると言うのを強く断わられて、いつものご姿勢で帰って行かれる後姿を見送りながら、実にほのぼのした思いで帰路についた事であった。

先生が、我が河上肇記念会の会合に出席して下さった最後は、昨年十二月九日楽友会館で住谷先生に「一九八〇年代と河上肇」というお話を願った例会であった。

寒い夜であったが、最後に散会に際して、特に若い人々に向って　後につゞけ　後をたのむと言葉を強めて繰返し訴えられたのを忘れる事が出来ない。

もう一つ。私として恐縮に耐えぬのは、年頭に墨痕あざやかな賀状を頂戴したが、それにわざわざ「昨年は一方ならぬお世話になりました。本年もどうぞよろしく」と書き添えて下さっている。何たる事であろうか、穴があれば入りたい気持ちである。

今一つ、思いがけないとと。去る三月一九日付　左京郵便局受付　左京区岡崎東福ノ川一〇　末川博名義の振替口座払込の通知があった。

ご遺族のお心遣りであるとは思うが、先生のわが河上肇記念会に対する深いお心を思わざるを得ない。近く霊前に参じて、河上肇記念会の会費ありがたくしかと受けとりましたと報告するつもりである。少からず私共を驚かせたこの払込票は、記念として永く会に保存しておき度いと思う。

末川先生と運転手

安井　功

告別式の前日、車庫で私たち夫婦は日なかかかって車を清め磨きあげていた。一九七二年の春、先生は長女の小方泰子さん、住谷悦治先生と共に山科、醍醐の花見をされた。その帰りに我が小屋に休憩されたことを回想した。「萬里清風和気満室」先生の額のかかった部屋で一行は一服された。「家を建てて書を飾るのはわかるが、書をかけるために部屋を造ったのは君だけだ」と談笑された。先生は横にかかっている「清風満堂」に目をとめられ「住谷君なかなかうまいね」と賞められた。今までにこにこ笑っていた住谷先生はえらく照れてお顔は真っ赤になった。ふと、先生は何か考えごとをされている様子に見うけた。数日して、先生から電話がありすぐさま参上した。「和気満蘭室座中千里近」の書を渡され「安井君あの部屋にはこれがいいよ」といわれ、解説もされた。明日を控えて磨いている車の後にある部屋に、その書はでんとかかっている。

告別式は、底冷えが身にこたえる寒い日であった。霊柩車のすぐあとに「末川家第一号車」は先生名付の清風タクシーが続いた。喪主である長男清先生が乗る黒色のクラウンに鹿ケ谷おろしの粉雪が紛々と舞い、ハンドルを握る私はかって先生のお供をした時の山科疏水の花吹雪を思いうかべた。

花山火葬場で、先生と最後の対面をさせて頂いた。何の苦痛もない安らかな聖者のお顔であった。神も仏も信じない私はいつのまにか頭をたれ合掌していた。暗くなった頃、火葬は終った。先生の身の廻りをお世

話された小方泰子さんのおことばで、私もお骨を捨わせて頂いた。お骨はまだ暖かく、美しく、軽かった。

東山に昇る月を背にして、車は下山した。五条バイパス、東山、岡崎の道は、先生のかっての山科月見の帰り路でもあった。端午の節句の月夜に大門英太郎氏、立野夫人と。中秋の名月を賞でて再度も、岡部伊都子先生と共に。

先生は静かな月見をこよなく好まれた。眺望のすばらしい山科西野山の森田茂家から見る中秋の名月は、先生の心の琴線を鳴りひびかせた。森田君はかって京大経済学部竹本信弘助手のよき仲間であり、現在は私の娘婿である。彼との出合いは、娘が時計台下でパクられた報らせを彼からうけた時であった。それからほどなく、二人は結ばれた。先生はこの若き夫婦を暖く見守り、助言をあたえられ、励しの詞は三人の孫たちまで及んでいる。「いつも心に太陽をもって　清く明るくすこやかに。朋ちゃんの未来のために。八十翁博」「すくすくと早く大きく伸びましょう　もみの木のように　まっすぐに。森田礼君のために　宋川博」末っ子の文にも、先生はお忘れなく門出の詞をおくられた。

車は福の川の表通りに静かにとまった。今日の正午すぎ、先生の教え子たち（立命館大学法学部教授）が棺を担いだ片側道を、清先生にいだかれた骨箱に入った先生がお還りになる。「安井君。いいよ。いいよ」と手を振り、一歩一歩軽く踏まれ、愉しむが如く歩まれた、心ゆたかな先生の姿は再び見られない。「おじいちゃん。よく乗せて頂いたわね。安井さんの車もこれが最後ね」小方泰子さんがポツンとつぶやかれた。今まではっていた糸が切れたよう、心の支えを失って止めどもなく溢れでる涙は頬をつたい、私の顔はグシャグシャになった。

私たち夫婦は戦後引揚の途中、撫順で長男を死なした。栄養失調でミイラのようになり両眼が溶けて流れた悲惨な我が子の死は、活字によらず親たちの古い眼を開かせた。帰国して生れた次男は成人しても酒も煙草も無縁のまじめな若者であった。彼は急に職場から姿を消し、大塚有章先生の毛沢東思想学院に身を投じた。うろたえ動顛した私は、先生に教えを請うた。愚かな父親を労わるが如く諭された先生の詞は今も忘られない。「大丈夫だよ。よい青年だ。もっと信頼せよ」

先生は未来を信じ、未来に生きる人である。

福井孝治君を悼みて

藤田敬三

三月十三日の未明に福井君がその七十七才の生涯を終えたことを令息洵氏から聞かされた時、かねて覚悟はしていたものの、来ることの余りにも早かったこの訃報に堪えがたい衝撃を受けたのでした。つい二三日前に、たんがつまる苦しみも気管を切開したので楽になった、とも聞いていたので、間もなく傷のいえ次第かるい会話ぐらいはかわせることだろうと念じていた矢先のことで今更のくやみがとみ上げてくるのでした。

福井君は私より一年あとの大正十一年の京大経済学部卒ですが、あの当時の図書館の大閲覧室の常連として顔見知りとなって以来、十二年頃のベルリン時代、昭和四年頃から三十二年の私の退職迄の大阪商科大学（後の市立大学）時代、それから今日に至る大阪経済大学時代の、前後を通じて六十年にも近い学界遍歴の同行者であったという意味では、まことにめずらしく長い相棒的存在でした。この年月の間まづは仲良く苦楽を共にしてこられたのもお互がこの宿命的な出合になにがしかの意義を認めて、いたわり続けて来た証左ともいえましょう。しかし飜って考えて見れば、福井君のような優れた学究ことにマルクス経済学の碩学の

そばに、私のような凡庸な一教師がこの長年に亘ってつきまとっていたことが、福井君自身は勿論、わが学界、教育界に如何に大きなマイナスではなかったかと常々反省させられるのでした。ことに福井君と私とでは、その学問的水準の程もさることゝ乍ら、研究分野の隔りのせいもあって、とり立てていえる程の切磋琢磨の実も挙げられなかったことは心残りの一つでした。ではありますが、思想や心情の上での共鳴や、それなりの実践の面では行動を共にすることが多く、自然色々の運動などでも顔を合せるのが常でした。ことに元来河上ゼミに関係のなかった私が、いつしか先生の辱知を頂くこととなったり、末川先輩を初め多数の個性豊かな思想家、運動家の集団たる河上会や記念会の諸氏と相知ることが出来たのも全く福井君を通じてでありました。それだけ福井君の片割れのような私が、今この冊子の中で、このような形で語りかける悲しいめぐり合せには堪え難いものがあります。もともと私などよりは大分若く、平素、体操、散歩、ヘチマ摩擦は勿論、煙草以外は飲食のすべてに至る迄人一倍摂生的であった恰も君のその比類なく貴重な余命の上に容赦ない宿命的な制約が加えられるこの非情をただ黙して受けることは私には出来ません。

君は仕事の上では研究は勿論、教育者としても雲の如き逸材を学界初め各界に残し、私的にも全く後顧の憂もなくなった昨今、若し君が高校時代から敬慕してやまなかった河上先生から「今の日本のような生甲斐もない世界にはいい加減に見切りをつけて、早々にこちらへ来ては」とのおさそいを受け、遠くは森耕二郎君、岩城忠一君等の親友、近くは末川先輩等に迎えられての旅立ちならば、一応は納得も出来るというのが今の私の気持です。

だがしかし東西の河上会の同人が近く合同して運動の躍進を企図しつつある恰もこの時に、正にかなめの人福井君を喪うことは、こちらの都合としては何とも遺憾に堪えない恨事であります。ただ令息の話によれば、君もそのうち河上先生から程遠からぬ洛北の地に骨を埋める用意をしつつあるとか、さすれば、もの言わない君ではあってもお互の心の触れ合いは続けられ、何かの折には、その鋭い論理とやさしい思い遣りでなにくれと励まして貰えることもあろうと慰められもするのです。

ではこれを以て河上会での私のさようならを終ります、福井君、何卒安らかに。

東京河上会と河上肇記念会との統合について

事務局

十一月頃、かねて東京から話があった統合の件につき要請があったので、十二月三日大門が上京。学士会館で東京河上会の白石凡、小林直衛、野口務、生沼曹喜等々の常任委の諸氏とこの件につき話し合った。

大門は上京に先立って、末川博、住谷悦治、天野敬太郎、藤田敬三、福井孝治各氏と大体打合せ、統一については全く異議がない旨席上申し上げた。

東京河上会は創立も古く、委員諸氏もようやく老境に入り、しかも実際に会の運用にあたる若い実務の人の銓衡難があり、幸い河上肇記念会が創立以来比較的順調に発展、しかも若い実務の人々を吸収している現状と、近づく河上肇先生生誕百年の記念事業の計画・実行のためにも、この際統一が適当であろうと言うのが、主たる趣旨である。

引き続き十二月九日京大楽友会館に於ける記念会の例会に、わざわざ白石凡氏が上洛この会に出席、親しく末川、住谷、天野各氏初め出席会員にも東京河上会の意のある所を申し述べられた。

更に年を越えて、一月三一日要請があって大門が再度上京、学士会館で昼から四時頃まで白石、小林(直)、生沼、野口の各氏と諸般の打合せをしたのであるが、二月一六日東京河上会の総会席上に諮って最終の決定をするとの事であった。

さて二月一六日は、末川先生ご逝去の日であったが学士会館で総会が開かれ、その総会報告を頂いたが、統一に関する部分は次の通りである。

一、「東京河上会の発展的解消」については、意見が活発に交わされました。「解消」というより「改組」であり、諸般の事情を勘案し、河上肇記念会と統合して再出発するのが適当であるという意見に落ちつきました。

一、会の目的を達成するためには、組織と活動をどのようにするかを、河上肇記念会とよくよく協議し研究を重ねる要があり、その担当者として、堀江邑一と白石凡が選ばれました。

さて其後、末川先生、福井先生の相つぐ不幸があったり、年度末に当ったこともあって未だ具体的談合に至っていないが、近く双方とくと相談すべき機会を作るつもりである。(大門)

『第一回講演会』講演要旨

演題　〝一九八〇年代と河上肇〟

講師　住谷悦治氏(前同志社総長)

一九七六年一二月九日　京大楽友会館

〝一九八〇年代と河上肇〟と云う、実に大きな講演テーマをいただいた訳ですが、今後における河上肇研究をいかに進めるのか?と云うことを中心として、話したいと思います。

河上肇研究は現在におきましても熱心に行なわれておる訳ですが、降旗節雄氏によれば、三つの類型整理が行なわれている。(1)全面肯定の立場―住谷悦治―、(2)全面否定の立場―大熊信行―、(3)河上のヒューマニズムや求道精神に敬意を表しながら、理論や実践のあり方に批判的な立場―大内兵衛・古田光―。注1　さて、ここで重要なことは、「求道の戦士とヒューマニズム」の結びつきと云うことである。この結びつきは、河上の思想性と云うことに成ろう。つまり、河上の主張する所の「『科学的真理と宗教的真理』の弁証法的統一」注2と云うことに成りますが、河上の科学的方法論は恒藤・田辺との会話の中でも明らかに、弁証法的唯物論の立場である。が堺利彦が云ったように「ぬきがたき人道主義者」であることも本人が認める事実である。この河上の思想性について、古田氏はM・ウェーバーの立場からの河上肇研究を提起されている訳ですが、私もこの提起には賛成であり、〝一九八〇年代と河上肇〟を展望してみるに、河上研究の方法論的基盤は、このあたりではないかと思えます。

注1.　古田光『河上肇』東大出版(UP版)一九七六年

2.　河上肇『獄中日記』世界評論社　一九四九年

(文責　事務局)

『第二回講演会』報告

演題　〝青年と河上肇〟

講師　相澤秀一氏(大阪経済法科大学教授)

一九七七年二月一八日　大阪好文倶楽部

来会者二九名。講演に先立ち、本会世話人代表　故末川博先生に対し参加者全員黙禱。

講演は『河上肇の人と学問』注1に従って行なわれ、河上肇の人間像、学問に対する態度(以上『会報』2号参照)を述べられた後、京大における河上の授業風景、青年に接した態度を「河上の授業は、実に多くの学生が聴講しており講義室は常に満席で、後ろ側では立って聴講、通路

もぎっしり満員と云った具合に、今のマスプロ教育と同じ現象のようでもある。しかし、重要なことは、小生も含め当時の青年は河上の講義を自らの意志に基づいて聴講しており、これも河上の思想なり人なりに対する青年の意志表示であったと考える。又、宇都宮徳馬君が官憲に逮捕され、釈放された際に『先生、私の行動は誤っていたでしょうか』と尋ねた所、『君が正しいと思うなら、正しいのではないか』[注2]と答えられた、と云うことだが、この中にも、河上の青年に接する態度が、現われている。

講演終了後、相沢教授を交え、来聴者全員自己紹介を行なったが、10代から70代までの各年代が参加、意義ある講演会であった。

相沢教授の河上肇「論」については、『経済学とその周辺』（雄渾社一九七六年刊）に網羅されているので、御紹介しておきます。

注1　相沢秀一「河上肇の人と学問」『河上肇記念会会報』第二号一九七七年一月刊

注2　宇都宮徳馬「水田三喜男君のこと」『日本経済新聞』及び河上肇『自叙伝』1～2岩波書店　一九七六年参照

『総会記念講演』要旨

「社会問題研究」について

天野　敬太郎

元の雑誌は第一～一〇六冊、大正八年一月から昭和五年十月まで継続発行、第八九冊まで河上個人雑誌、後は共同雑誌。

復刻版の別巻に、全体の見通しに便利なように「全貌」として、発行年月・号数対照表等、及び将来事典編集の参考にもなればと思い、索引を掲載しておいた。論文部類別、事項、人名等。

長編の論文は「マルクス資本論略解」で、第四五―七二冊（一九回連載）、計五一五頁。或は「唯物史観に関する自己精算」第七七―八八冊（一〇回連載）、計三五八頁である。

また長い題名の論文は『生活難の事実を言葉の上で否認することにより解決せんとする高田・気賀二博士の意見＝資本主義弁護論の現象形態の一つとしての僧侶的扮装」で、第七四冊に載る。最も短い題名のものは、「断片」、第二…六五冊に一〇篇ある。

河上ほど論争の多かった学者も数少ないと思うが、論争全三六件のうち、本誌に掲載されたものは約一三件である。

現時まで第三者の多数の研究がある論文は「資本論劈頭の文句とマルクスの価値法則（櫛田民蔵氏の同題の論文について）」第六三―六四冊であり、櫛田民蔵氏応答（一九二五）、研究批判遊部久蔵氏他三氏（一九六五―七三）となっている。

（文責　事務局）

・河上研究の基礎

著作目録、関係文献目録、河上肇事典、河上肇全集。事典はまだない。全集は目下計画中であるが、著作が非常に多いため簡単にはいかない。四十巻前後になろう。

・「社会問題研究」復刻版

事務局だより

◆末川先生逝きて

当会発足の時より御尽力下さった末川先生に続き、今後は住谷悦治先生に世話人代表をお願いすることになりました。

東西合併し、生誕百年記念事業をひかえ、会は多事。これまで同様、会員諸氏の御協力をお願いします。

◆当会の財政について

現在は会報の発行（年四回）と講演会をかねた例会の開催（年六回）が、当会の主な活動でありますが、これらの費用は会員諸氏から郵便振替によって頂戴している三〇〇〇円の年会費によって賄われております。

四月二十日現在で昭和五十二年度会費の納入状況は、一〇五名、三一五・〇〇〇円であります。

因に会報を一回発行するのに、いくらの経費がかかるかを、前号（第二号）を例に、ご披露しますと、

印刷費（会報分）　三七・五〇〇円
〃　（同封の入会案内・会費納入願分）五・六五〇円
封筒代　三・九五二円
郵送料　五一・〇四〇円
（合計）　九八・一四二円

となっております。

お気付のとおり、郵政省に払う代金が費用の半分以上を占めており、公共料金の値上げが得意な政府は、当会の財政にとり、最も忌むべき存在ではありますが、それはさておき、年間四回発行の計画を完遂するためには、約四十万円の予算を見込まねばならず、現在の会費納入状況では、政府同様赤字国債（？）の発行という仕儀にもなりかねません。

申しおくれましたが、以上の会報発行費は、八五〇名の方々にお届けした費用で、このなかには会費をお納め下さっていない方（未入会の方、すなわち昭和四十七年の遺品展御来場者、法然院墓参者等、何等かのかたちで当会に縁りのある方々）も大勢含まれております。現在会費納入者一〇五名、会報発送数八五〇名でありますから、宣伝誌（？）の方が圧倒的に多いという現状であります。この分は会員＝会費納入者に御負担いただいているという訳でありますが、これは当会の会則にあります「河上肇先生の人格と業績を讃え、之を広く永く伝える……」の趣旨から、今後も、可能なかぎり多くの方々にお送りしたいと思っております。

なお講演会の方は、毎回その都度五〇〇円の会費をいただいておりますので、会場費、お茶代、案内状葉書代、印刷費等の経費と収支バランスがとれております。

以上長くなりましたが、既に御賢察のとおり、決して潤沢な財政ではございませんので、この面からも同封の「お願い」の通り、訴える次第でございます。

◆「京大学生社会運動史年表」について

当会と密接な関係にあります京大白川会が、日本歴史上にも意義ある一頁となった「京大学生事件」の五十周年記念として、京大学生社会運動史を編修することになり、今回その第一事業として「年表と運動参加者名簿」を作成致しました。御希望の方は当記念会事務局へお申込み下さい。頒布実費　送料共一・〇〇〇円。

編集後記

先逝く。一つの時代が過ぎたと思う。当会の移ろいも、またこれに似ないか。

会の「相続」のことが、頻りに云われもするが、直近世代の河上像が、どんなスクリーンを通過して、どんな形で、次世代に継承されるのか、されねばならないのか。

こんなことについての問答とそが、「相続」に意味を付すると思うのだが。

途中で追悼特集となった本号、お届けが予定より遅れたとと、お詫びします。

（S）